

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

真実と虚偽の狭間に措定された「史実性」の追究＜共同研究＞

オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究＞

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2020-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 風間, 計博 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00009489 |

真実と虚偽の狭間に措定された「史実性」の追究

文・写真 風間 計博

共同研究の対象と射程

本共同研究では、近現代のオセアニア・東南アジア島嶼部を対象地域とし、植民地統治や戦争、出稼ぎや移住等、他者接触の具体的事例を中心に扱う。当該地域においては、第二次世界大戦後、多くの新興国が独立した。今日に至る歴史動態のなかで、人びとは侵入してきた他者に支配され、あるいは自発的に移動して多様な他者と遭遇し、偶発的な暴力や軋轢に巻き込まれ、またあるときは他者との平和的協働を経験してきた。

諸地域の地理的連続性や歴史的共通性を考慮しながら、本研究では、他者接触の経験と歴史記憶に関わる感情と想起の場に着目する。そのとき、経験の個別性や歴史の固有性を見据え、さらには研究者の背負う当事者性にも配慮する。具体的には、太平洋戦争や植民地支配、国内の暴力的弾圧、軍事基地の設置や核実験による被曝、出稼ぎや移住、歴史教育とナショナリズム等の経験や語りを対象とする。そして、虚実入り混じる現代世界における、感情をともなう歴史記憶に関わる「史実性」の生成過程を追究する。

現代世界における「ポスト真実」

合理的思考により普遍的知識が産生されるという近代的前提は、ポストモダン思想の潮流においておおきく揺らいできた。近代的世界観は、多様な試行錯誤を通じてその超克が試みられてきた。文化人類学においても、黎明期から文化相対主義的思考に準拠して、普遍性を標榜する近代の合理主義や自然科学的知に疑義を呈してきた。

歴史叙述の議論においても、構築主義や相対主義による近代批判の潮流に呼応するように、単一の史実 (historical fact) に固執する狭隘な実証主義歴史学に対する批判が起こり、多元的歴史概念が提出されてきた。史実とは、学術的論争のなかで時間と場所が特定され、現実には起こったと認定された、個別文脈のなかに意味づけられた過去の出来事である。実証主義批判の潮流は、真正な文書のみを重視する正統な歴史学で等閑視されてきた、口碑伝承による民衆の歴史を救出する試みと軌を一にする。こうした議論の意義を認めることは、十分に可能である。

しかし同時に、史実追究の安易な放棄は、慎重に回避されるべきである。史実や論証の無視、あるいは過度の懐疑論は、

露骨な虚偽の主張に利用される危険性を孕むためである。学術領域から抜け出したポストモダン思想は、俗流の相対主義や懐疑主義に縮減され歪曲されて、一般に受容されてきた。その懸念が現実化して、人びとは虚偽情報に踊らされるようになり、2016年には「ポスト真実 (post-truth)」という言葉が人口に膾炙した。

「ポスト真実」は、単なる誤謬や誤解として無視できるほど軽微なものではない。人びとを強く駆動させ、動員する力をもつ。旧来の報道機関の権威は嫌悪されて失墜し、根拠不明の電子情報が流布して強い影響力を与える事態が生じている。「ポスト真実」時代の反知性的特質は、従来の主義主義やロマン主義、学術的な理性批判とは異なる。むしろ、合理的思考や明白な証拠を拒絶し、批判を無視し、虚偽の主張を感情的に肯定する。その特質は、いわば、現代を生きる人びとの有する傾向性 (disposition) に反映しているという解釈が可能だろう。

グローバル化のもたらす価値や倫理の不安定な揺らぎのもと、既存の権威への不満を抱く人びとによる、ルサンチマンをともなう反知性的態度への支持と感情の優越性は、たんに啓蒙近代の不徹底に帰着させようという表層的理解によって片づけられるものではない。むしろ「ポスト真実」の台頭は、長期にわたり卓越してきた、近代的認識論の根本的な転換を示唆する可能性さえも指摘されている (Mair 2017)。

現代世界において、感情を鍵概念として個別経験と歴史記



日本軍玉砕地ベシオのレッドビーチに放置された戦車の残骸。太平洋戦争時、現地の住民を排除して要塞化したベシオにおいて、日本軍守備隊とアメリカ軍上陸部隊が壮絶な戦闘を繰り広げた (2019年8月、キリバス共和国南タラフ)。

風間 計博（かざま かずひろ）

京都大学人間・環境学研究科教授。専門は人類学、オセアニア社会研究。編著に『交錯と共生の人類学』（ナカニシヤ出版 2017年）、共編著に『共在の論理と倫理』（はる書房 2012年）、『オセアニア学』（京都大学学術出版会 2009年）等。

憶のあり方を検討することは、知識の内包する権力や近代性を批判するうえできわめて重要である。ただし、他者接触の歴史記憶にともなう感情が、他者排斥の強い動力となりうる点を看過すべきではない。本共同研究においては、多様な作用を及ぼしうる感情の複相性を考慮しながら、史実の追究をひとまず留保したうえで、史実と虚偽のあいまいに「史実性 (historicity)」を措定する。

「史実性」とは、文書の有無にかかわらず、歴史知識と個別経験の間に布置された、説得性やリアリティをもつ歴史記憶の実践的な表現であると、暫定的に規定しておく (Hermann 2005)。ここで現代世界において、「史実性」はいかなる性質をもつのか、いかなる条件のもとで生成するのか、という問いが浮かびあがってくる。

「史実性」と「真摯さ」

歴史記憶には、意図的に虚偽が混入されている場合も、偶発的に誤謬が含まれている場合もある。本共同研究においては、虚実入り混じる情報が飛び交う現代世界において、他者接触に関わる民衆の多様な歴史経験の記憶が、いかに「史実性」を獲得するのか、発話行為や対面状況、感情や身体性、モノや景観と分離不能な想起の場に関連づけて追究する。中心的課題として歴史記憶を検討するにあたり、ここで対照的な2つの記憶形態を便宜的に想定する。

1) 集合的記憶：国民やエスニック集団を統合する、首尾一貫した公的な記憶形態

2) ヴァナキュラーな記憶：人びとの日常生活に根差した、矛盾や曖昧さを含む記憶形態

検討の手續きとして、公的な集合的記憶とヴァナキュラーな記憶という、2つの歴史記憶の相互関係を見据えながら、人びとが感情をともなって、多様な性格を有する歴史記憶をいかに生成・継承あるいは忘却してゆくのかを考察する。他者接触に関する歴史記憶は、植民地経験の語りや、移民との相互行為、戦時の遺物、再現された景観、歴史文書等を通して繰り返し想起される。想起された歴史記憶は、静態的な情報に留まることなく感情を揺さぶり、ときに過激な行動を引き起こす力能を発揮する。歴史記憶は虚偽や誤謬を包含するか否かにかかわらず、感情に結びつき、人びとを突き動かす強い潜在力を有する点に着目すべきである。

歴史記憶のもつ「史実性」は、狭隘な実証主義を乗り越え



フィジーで開催された祭典において、エスニックな固有性を示す踊りを披露する移民のバナバ人女性たち。バナバ人は、英国植民地期に故郷バナバ島（現キリバス領）からフィジーへ強制移住させられた苦難の歴史記憶を継承している（2018年8月、フィジー共和国スヴァ）。

る可能性をもつ。しかし一方、紛れ込んだ虚偽を見きわめるには、注意深い検討が必要である。ここで、歴史への「真摯さ (truthfulness)」(モーリス＝スズキ 2014) を鍵概念として導入することになる。「真摯さ」とは、歴史に関わる人びとが保持すべき慎重な姿勢であり、「史実性」の定立には、「真摯さ」が必須の条件となる。さらに、いかなる立場からの「真摯さ」や「史実性」であるのか、個別の文脈を吟味する必要がある。

共同研究では、2つの歴史記憶の入り組んだ関係を見据えながら、多様な他者接触の具体的事例を検討する。そして、強い力能をもつ多義的な歴史記憶と感情から、実践を通していかに「史実性」が立ち現れるのか、あるいは何が忘却されるのかを明らかにする。

参考文献

- モーリス＝スズキ, T. 2014 『過去は死なないーメディア・記憶・歴史』 東京：岩波書店。
- Hermann, E. 2005 Emotions and the Relevance of the Past: Historicity and Ethnicity among the Banabans in Fiji. *History and Anthropology* 16(3): 275-291.
- Mair, J. 2017 Post-Truth Anthropology. *Anthropology Today* 33(3): 3-4.